

# 論文の内容の要旨

氏名：林 尚 示

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

論文題目： 生徒指導の機能を融合した「特別活動教育」の構築

## 序章

これまで、特別活動は教育学の研究対象としてはほとんど注目されてこなかった。一方で、特別活動を教育実践としてみた場合、児童生徒の社会的資質の育成に与える生徒指導上の影響は甚大である。そのため、生徒指導の機能と特別活動の新たな形態を提示することが求められる。そこで、本研究では、特別活動を学校教育の中心課程へ位置づけることを検討した。日本の教育課程では、特別活動は各教科と並ぶものとされている。しかし、生徒指導の機能との関係を考慮すると、特別活動を単なる領域とは考えず、より広義に、統合概念でとらえる時期に来ている。統合概念とは、各教科や教科外の領域を統合するものであり、また、生徒指導の機能と教育課程を統合するものである。そのため、本論文において、生徒指導を融合した「特別活動教育」としての機能構築を図る。そして、教育課程上の中心課程としての特別活動の位置づけを教育的に解明し、生徒指導の場としての特別活動の役割を評価する。

なお、機能とは教育課程のシステムに貢献する作用のことである。教育課程を含め、様々なシステムは機能しなければ維持することも存続することもできない。教育課程を機能させるものを「特別活動教育」として構築する。教育方法学の視点から歴史研究と調査研究を通してこの主題に迫った。それは、教育課程を維持存続させるものとしてこれまで潜在的機能として作用してきたものを、「特別活動教育」として顕在化させる挑戦である。「特別活動教育」が顕在的機能として解釈可能となれば、教育課程は領域の集合体としてのシステム検討の段階から脱却できる。そして、教育目標を達成するための順機能と、その阻害要因としての逆機能の検討の段階に進むことができる。機能概念は、これまで見過ごされてきたが、教育課程のシステムの構造形成を図る上できわめて重要である。

第1章では、「特別活動教育」の構築のための現状分析を実施した。第2章では、「特別活動教育」の成り立ちについて探索的に検討した。第3章では、生徒指導を融合した「特別活動教育」の内容について活動別に検討した。

## 第1章 「特別活動教育」の構築のための現状分析

山口満氏による戦後初期の生活教育についての研究、遠藤忠氏による学級活動の歴史研究、佐々木正昭氏による生徒指導の研究の到達点について考察した。その結果、これらの先行研究と本論文との相違点として、先行研究では特別活動が教科等と同様に重要であるとする傾向がみられるのに対して、本論文では特別活動が教科等よりも重要であるという点を確認していることが明らかとなった。また、文部科学省が領域として特別活動を認識しているのに対して、本論文では「特別活動教育」として機能的側面の可能性を検討していることが確認された。

## 第2章 「特別活動教育」の成り立ち

「特別活動教育」の成り立ちについて考察した。その結果、明治後期・大正期の特別活動前史、昭和初期のカリキュラム統合、昭和10年代のカリキュラム統合、戦後初期のコア・カリキュラムといったプロセスモデルが生成された。明治後期から戦後初期までの研究は、東京高等師範学校附属小学校の研究を時期別に分類し特徴が認められるか検証した。その結果は、「特別活動教育」の観点から解釈可能と考えられた。

たとえば、東京高等師範学校附属小学校の樋口勘次郎と棚橋源太郎の実践は、今日、学校行事に内包される遠足・集団宿泊的行事の嚆矢であると考えられる。樋口勘次郎、棚橋源太郎の教育実践は、両者のカリキュラム形態は異なるが、ともに「特別活動教育」の文脈において開発されたものである。また、樋口長市は自治活動に着目したことで、学習者中心の学級活動の嚆矢と考えられた。さらに、樋口長市の思想は、同校での児童会活動の源流でもあることが示唆された。明治後期・大正期に、学制以来の形式的な教科並列型

カリキュラムの弊害に対する打開策として、「特別活動教育」の源流と見られる活動が始められるようになったと推定された。また、昭和初期の東京高等師範学校附属小学校で、郷土教育の展開過程で生徒指導の機能を有した「特別活動教育」を模索し、戦後初期には、コア・カリキュラムを含むカリキュラム類型の研究をとおして、生活経験に根ざした「特別活動教育」の特徴を示した。

さらに、戦後初期に千葉県館山市の北条小学校で実施された北条プランにおける能力評価の変遷から、「特別活動教育」の傾向を持つ教育実践の教育評価の可能性が示唆された。

### 第3章 生徒指導を融合した「特別活動教育」の内容

近年の特別活動の流れと教育実践の評価について検討した結果、評価の理念、形態、方法、観点に集約する傾向が明らかとなった。「特別活動教育」は子供の「病理現象」にどう立ち向かえばよいかという問いは、競争社会と寛容社会の対比によって応えられる可能性があると考えられる。社会的資質の育成をとおして豊かな人間性、社会性を育む「特別活動教育」の評価としては、計画段階、実施段階、完了段階のそれぞれに評価の可能性があると考えられた。

次に、担任教師の実施する学級活動・ホームルーム活動、自治的な活動が展開される児童会活動・生徒会活動、全校や学年で展開される学校行事に分類して、生徒指導の機能を融合した「特別活動教育」の機能構築の可能性を検討した。高等学校ホームルーム活動の歴史の検討からは、ホームルーム活動で個人的資質と社会的資質を育成するという生徒指導の機能が得られた。また、人間としての生き方への自覚を深めるホームルーム活動についての検討では、教員養成大学と一般大学の学生との間で学習機会に差があるという結果が得られた。

さらに、生徒会活動の現状と課題について検討を行った結果、評価形態や評価方法についての検討が十分に展開されていないことがわかるとともに、「特別活動教育」としての評価形態や評価方法の開発が展開できる可能性が示唆された。

そして、リーダーの資質を中心とした生徒会活動の集団づくりについて検討した結果、教員養成大学と一般大学の学生とで生徒会活動の参加経験が異なり、教員養成大学にリーダー経験者が多い傾向があるという結果が得られた。そのため、「特別活動教育」実施に際しては、一般大学の学生への指導をより充実させることが期待される。

歴史・政策・実践の側面からみた学校行事で育成される「力」について検討すると、「協調性・協力」や「団結心・団結力」などの生徒指導の機能を獲得できているという結果が得られた。これからの学校行事も「特別活動教育」の機能を持つものとして、関心や意欲、思考や判断、知識や理解などの観点から適切に評価する枠組みを作成した。

最後に、小学校から高等学校までの特別活動の内容別参加度を質問紙調査で実施して因子分析した結果、「身体活動型」「文化活動型」「奉仕活動型」「自治活動型」の4類型が抽出できた。このことは「特別活動教育」の類型化への示唆を与えた。また、確認的因子分析モデルを作成した結果、小学校時の特別活動への積極性と中学校時の特別活動への積極性に高い正の相関 ( $r=0.84$ ) があることが得られた ( $N=364$ )。

### 終章

本論文では、教育課程を維持存続させるものとしてこれまで潜在的機能として作用してきたものを、「特別活動教育」として顕在化させた。「特別活動教育」は顕在的機能として解釈可能であることが示された。機能概念は、これまで見過ごされてきたが、教育課程のシステムの構造形成を図る上で極めて重要であり、そこに機能としての「特別活動教育」の価値があることを提案した。

本論文では生徒指導を融合した「特別活動教育」の機能構築の可能性が示された。特別活動が児童生徒の実態から出発する活動を中心とした「特別活動教育」の原型であり、「特別活動教育」を成り立たせる機能が教師による生徒指導であることを論じた。

本論文では、特別活動の教育課程上の位置づけと役割について検討を実施した。その結果次の3点の興味深い結果が得られた。

第1番目に、特別活動によって「信頼に基づく日常性の構築と共同体の実感」がなされるという佐々木正昭の指摘を展開できる可能性が示唆された。日常性の学校教育への導入として特別活動の源流が推測された。そして、共同体の実感のため、生徒指導を基盤とした特別活動が機能概念としての「特別活動教育」

につながるということが認められた。

第2番目に、生徒指導を融合した「特別活動教育」につながる特別活動の生成過程を検討した。教科ではない特別活動は、明治後期以降、教師の教育実践を通して、教育方法上の工夫として学校教育に登場し、その人間関係能力向上の効果等が着目させて戦後の教育改革の中で教科と同様に目標と内容を持って教育課程上に位置づけられてきたことが認められた。

第3番目に、望ましい集団活動をとおして行われる生徒指導を融合した「特別活動教育」の機能構築をめざして、特別活動にはその目標を達成するために生徒指導の機能が必要なことが示された。具体的には、教師は社会性指導や個人的適応指導など生徒指導の機能を十分に活用して児童生徒を指導する必要があることが得られた。

歴史的事実の調査と質問紙調査という複数の研究方法を総合的に活用し、学校が「特別活動教育」をとおして共同体としての機能を維持してきたメカニズムを解明した。そして、生徒指導の機能を有する「特別活動教育」を学校教育の中心課程に位置づける提案を試みた。今後の特別活動と生徒指導の研究に対する示唆は、それぞれについての歴史研究や実証研究を関連させ「特別活動教育」として統合できる可能性を示したことである。

### 基礎論文

1. 林尚示 (1997) 昭和初期の学校カリキュラムにおける統合の問題に関する研究—東京高等師範学校附属小学校の教育実践を中心として—, アガトロギア研究(人間主義学会紀要), 第7号。
2. 林尚示 (1998) 昭和10年代の学校カリキュラムにおける統合の問題に関する研究—東京高等師範学校附属小学校・国民学校の教育実践を中心として—, 教育方法学研究(日本教育方法学会紀要), 第23巻。
3. 林尚示 (1998) 戦後初期東京教育大学附属小学校のカリキュラムにおける学習参加形態—教科カリキュラム・広域カリキュラム, コア・カリキュラムの比較研究—, 学校教育研究(日本学校教育学会紀要), 第13号。
4. 林尚示 (2002) 歴史・政策・実践の3側面から見た学校行事で育成される「力」, 山梨大学教育人間科学部紀要, 第4巻第1号。
5. 林尚示 (2003) ホームルーム経営の編成, 月刊ホームルーム, 9月号, 学事出版。
6. 林尚示 (2003) 高等学校ホームルーム活動の歴史, 山梨大学教育人間科学部紀要, 5巻1号。
7. 林尚示 (2007) 特別活動における生徒指導に関する研究, 東京学芸大学紀要総合教育科学系紀要, 第58集。

### 参考論文

1. 林尚示 (1997) 千葉県北条プランにおける能力評価の変遷に関する研究—コア・カリキュラムの構造変遷との関連に注目して—, カリキュラム研究(日本カリキュラム学会紀要), 第6号。
2. 林尚示 (2003) 近年の特別活動論の流れと教育実践—活動の評価に注目して—, 日本特別活動学会紀要, 第11号。
3. 林尚示 (2005) 豊かな人間性・社会性を育む特別活動, 日本特別活動学会紀要, 第13号。
4. 林尚示 (2007) 人間関係能力の段階的育成, 学校教育研究(日本学校教育学会紀要), 第22号。
5. 林尚示 (2012) 小学校から高等学校までの特別活動の内容別参加度—学生対象質問紙調査による比較—, 日本特別活動学会紀要, 第20号。